

## 文化財 IPM ワークショップに参加して

池田素子

私の勤務する京都国立博物館(京博)は、平常展示館を改築工事のために長く休館していましたが、今秋9月13日、平成知新館(新館)として無事にリニューアルオープンを迎えることができました。「文化財 IPM ワークショップ」が開催された8月初めは、1ヶ月後にせまったその開館準備に忙殺されていた頃で、参加を見合わせるべきかどうか悩みました。しかし、そのような時期だったからこそ、このワークショップに参加してよかったと、もう3ヶ月が過ぎた今、あらためて感じています。

会場となった国立民族学博物館(みんぱく)へは、展示室や催し物の利用者として、何度か訪れたことがありました。施設の大きさ、展示室の多さ、多様な展示物…来るたびに驚きと新しい発見があるので、「博物館」と聞いてまず思い出す博物館のひとつです。今回は、ワークショップのはじめのプログラムで、ほんの一部分ですが、そんなみんぱくのバックヤードを見学することが叶い、収蔵品や環境の保存・管理についても、驚きと新しい知見を得ることができました。特に、「低酸素濃度殺虫処理」(低酸素処理)の現場を目にしたことは、とても貴重な体験だったと思います。

ワークショップ当日は、みんぱくの通常の開館日で、一部を除いて展示室は開かれ、夏休みの行事で来たような子ども達の姿や、エントランスでは織物・編み物の体験イベントのにぎわいも見られました。低酸素処理が行われていたのは、それと同じ施設の中、休室している展示室内でした。細かな説明は逃しましたが、3メートルはあったでしょうか、背の高い大きな展示物を養生し、ひとまわり大きな囲い組みをして、ガスバリアシートを被せ、窒素ガスを充填、ちょうど私たちが通りかかった時は、シートの中の濃度を測定し、状

況を監視しているところだったと思います。

低酸素処理は、安全性は高いと言われますが、処理時間が長くかかります。一方、博物館活動は多様化し、収蔵品の調査研究・展示・交流などがますます活発に行われるようになってきているため、時間や場所の確保が常に問題になります。そのような現況において、低酸素処理は「効率が悪い」というのが、これまでの私の認識でした。

けれども、みんぱくで見た低酸素処理は「効率の悪い」ものではありません。展示室の一部で資料の低酸素処理が行われていても、他の展示室やオープンスペースでは、通常通りの博物館活動が継続されていましたし、その大きな展示物も移動させることなく処理が行われていました(もちろん、安全に囲い組みをしたり、養生したりといった技術や時間は十分に必要でしょうが)。みんぱくに限らず、博物館では、展示準備や設備のメンテナンスのために、1ヶ月程度、全館休館あるいは一部の展示室が休室になることもありますから、低酸素処理に要する2~3週間の期間は、長すぎるわけではないのかもしれませんが。資料の材質だけでなく、人や環境の安全確保が求められる博物館活動の現況にあわせてみても、ここでは、低酸素処理が「効率の良い」かたちで実施されているように感じました。

だからと言って、低酸素処理が最も「効率が良い」殺虫処理方法だということではありません。

大切なことは、虫害を受けている資料(大きさ、材質、加害虫、加害状況など)と、それを取りまく状況(活用の頻度、施設の規模、施設の運用方法、費用や人員など)にあわせて、防除の方法を選択していくこと。同じようなことは、これまでの研修でも何度となく言われていることですが、みんぱくの展示室で低酸素処理の実際を見たことによって、自分自身、意識の変化を実感でき

たことは、今回のワークショップでの一番の収穫でした。

また、館内の見学を通して、みんぱくが、展示室内での低酸素処理だけでなく、二酸化炭素殺虫処理などの、各種の殺虫処理設備を備え、それぞれの効率的な運用に取り組んでいるほか、日常管理体制の整備とデータ化、資料や備品の材質調査、災害対策など、幅広く、そして専門的な活動がなされていることがわかりました。京博も新館の開館で以前より施設の規模が大きくなったため、さらに大規模なみんぱくの計画的なマネジメントには学ぶべきところが多くあります。さらに、このような収藏品や環境の保存・管理自体、またそのマネジメント全体が、調査研究活動として、活発に、前向きに進められているというのは、とてもよい刺激になりました。

みんぱくの見学につづく、「虫の観察」・「ダストの観察」・「カビの調査」の技術論のプログラムの中で難しかったのは、虫やダストのスケッチです。以前にも同様の研修を受けたことがあったのですが、あまり進歩はみられませんでした。せっかく顕微鏡をのぞいて虫の頭・胸・腹・脚などの構造を観察しているのに、全体のフォルムばかりなぞって、結局どの虫も同じように描いてしまいます。京博でも時々私のもとに虫が届けられるのですが、いかに自分が「見るべき部分を見ないで」

虫を判定しようとしているかがわかり、すこし落ち込みました。

技術論では普段は外部委託している部分、特にカビの調査方法について、新しい情報も得ることができました。虫のスケッチの結果からも、虫・カビの取り扱いは、私自身はあまり得意でないことがわかりましたので、これからもこのような研修に参加しながら、関連業種との相互理解を深め、細やかな連携につとめていきたいです。

8月7日は、よく晴れて朝からとても暑い日でした。大汗をかきながら歩いた、駅からみんぱくまでのずいぶんと長い道のりは、久しぶりに、博物館が季節や自然、地域の風土とともにあることを思い出させてくれました。新館のリニューアルオープンを1ヶ月後に控え、焦りもピークに達していましたが、丁寧に事象を見つめること、ひとつひとつを積み重ねること、ワークショップが進むにつれて、そういう日常管理の基本に立ち返り、平静さを取り戻すことができたように思います。文化財IPMコーディネータの資格を取得した目的のひとつは、資格を通して、研修の場、交流の場を広げ、新館の開館準備に生かしたいという差し迫ったものでした。まずひとつの目的が無事に叶えられ、今はすこしほっとしています。

(いけだ・もとこ 京都国立博物館)